優秀賞 千葉県 宇佐美 直恵 様 (30代 女性)

大人になったと実感する瞬間は人それぞれ、様々な出来事があるだろう。私が成人したと実感した瞬間、それは自分で稼いだお金で20歳の誕生月に年金を支払った時だった。

大学2年生になると周囲は「年金手帳を受け取った」、という人がちらほら出始めた。

大半の友人たちは「学生納付特例制度」を申請し、納付を見送った。しかし私はあえてその申請をしなかった。

私は成人する前、自分自身にこう問いかけた。

「法的に成人し、投票権という『権利』も持つようになる。一人前として認められる。幼い頃は予防接種や義務教育など、いろいろなものを社会に与えてもらった。でも成人した時、私は社会に対していったい何の義務を果たしているのだろうか？」

その問いに、何も答えられなかった。

周囲を見ると、社会人としてすでに働いている友人達はすでに税金も年金もおさめ、自立した「大人」になっていた。

「大人」として自分ができる事。社会に対して果たせる義務・役割。すぐに出来そうな事として私が思いついたのは、「自分で働いたお金で年金を納める」という事だった。

年金の納付が始まる前に、私はアルバイトを始めた。面接で「自分で働いたお金で年金を納めたいんです」と伝え、周囲の方々が温かく応援して、助けてくれた。

みんなに助けられて、少しずつお金をためた。

誕生月が近づいたある日、いよいよ私の手元に年金事務所から納付書と手帳が届いた。意気込んで封筒を開けたものの、書類の内容がさっぱりわからない。とにかくこのままでは駄目だと思い、届いた封筒を持って近くの年金事務所へ出向いた。

初めて入った年金事務所、何をどう言えばいいのかもわからない。やっと出た言葉は「あの、これが届いたんですが」という大人にあるまじき何とも情けない言葉だけ。担当の職員の方は慣れた様子で「ああ、学生さんだから払わないようにしたいのね」と私に声をか

けてくれた。

が、とっさに「いえ、払いたいです。そのために前もって自分で働いてお金を貯めたんです！」と自分でも驚くぐらいハッキリ、大きな声が出た。何かが自分の中ではじけたような、そんな気がした。

すると職員の方が目を見開き、嬉しそうに私に送られてきた書類について教えて下さった。

いろいろ教えていただき、その足で郵便局に年金を納付しに行った。当時の私にとっては大金、それも自分で頑張って働いたお金だ。窓口でお金を渡し、納付が完了した時、「ああ、これで大人として義務を果たせるようになった。」と心から実感した。

この日の事は10年以上たった今も鮮明に覚えている。

毎年私は誕生月にねんきん定期便を開き、保険料を納付した記録を確認する。その時に学生時代の納付履歴を見ると、一人前になりたくて背伸びしていた昔の自分の姿が目につかび、無性に懐かしい気持ちになる。

今私は会社の人事担当として企業年金に携わっている。

ここでもまた上司、先輩達、受給権者の方々をはじめ、多くの方に助けられている。

20歳の時、年金が私を大人として成長させてくれた。

そしてこれからもきっと、年金が私を成長させてくれるだろう。